

-----  
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.  
-----

2020年度第3回研究会（通算第5回目）

日時：2021年3月16日（火）～2021年3月18日（木）10:30-17:00

場所：オンライン

使用言語：日本語，英語

主催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」

1. メンバー全員による各自の進捗状況の確認
2. キャンベラチームとのミーティング

オーストラリア国立大学、メルボルン大学のメンバーからなるオーストラリアチームとのミーティングを行った。

・SCOPIC プロジェクト全体の進捗状況の報告を受けるとともに、コーパス構築に関する具体的な事柄を話し合った。

・日本メンバーの一部が共著者となっている「多言語コーパスにおいて言語間の差に影響する（同一言語を話す）個人間の差をどのように考えるか」を扱った論文の進捗状況の報告

を受けた。

・後述の Propositional framing に関する研究について議論を行った。

### 3. 「Propositional framing に関するディスカッション」

・昨年度開始した SCOPIC コーパスに基づく Propositional framing の類型論に関する研究に関する議論を行った。まず木本幸憲氏（AA 研共同研究員，兵庫県立大学）が「補文節構造とそれに並行的な構文の相関関係に関する類型論的分析」と題する発表を行いこれまでのコーパスのコーディングの数量分析によりわかった各言語の傾向を紹介した。その後発表内容に基づき全員でディスカッションを行った。概要は以下の通りである。

・UTT/ THINK については発話内容や思考内容が補文で表される頻度が高い言語とそうではない言語に分かれる。また Direct speech/ thought と Indirect speech/ thought の頻度にも言語ごとに大きな差があることがわかった。

・上記のような大まかな傾向はみられるものの、UTT/ THINK を導く動詞的フレームとして設定した COMP（補文）と PARA（並置）の区別、および、Direct/Indirect の区別の基準が言語ごとに必ずしも明確ではないため次回の研究会でこの点を明らかにすることにした。

・PROB については多くの言語が確かさ/ 不確かさを表す副詞を用いるのに対して、いくつかの言語では動詞「思う」+ 命題という構造を用いる頻度が高いことがわかった。前者の副

詞パターンについては副詞の語彙的バラエティに富む言語とそうでない言語の差が大きいこともわかった。

・キャンベラチームからは「補文標識の文法化」が興味深いサブトピックとなりうるであろうとの提案を受けた。関連してUTT/THINKを導くフレームとして動詞「言う」や前置詞または副詞「X みたい(な)」から文法化された要素を、補文を取る述部の主要部としてではなく、補文標識、あるいはUTT/ THINK マーカーとして文法化している言語が複数見られることもわかった。このメカニズムを類型化するため該当する各言語の構造を精査した。

#### 4. 「各言語出版用テキスト編集とそれに関するディスカッション」

これまで進めてきた各言語出版用テキスト編集作業を継続した。